

# 利根川近辺白鳥渡来・越冬記録報告書

1976～1977

小茂田 英彦

## I 渡来地付近の概況

### 1. 上流から下流へ

群馬県下を南下してきた利根川は、前橋市を過ぎるあたりから次第に向きを東に変え、神流川・烏川の水を加えその幅を増し（土手の間約1km）群馬県伊勢崎市と埼玉県本庄市を結ぶ坂東大橋下からほぼ東流する。

この橋の付近は、左右両岸から河原が延び（図1.イ）特に橋のすぐ下手では右岸からの発達が著しく、狭まった流れはおよそ100mに縮少し、河原を迂回するようにして左岸に迫り（左岸堤防までおよそ100m）テトラポットの壁をえぐるように流れ、反転しては右岸方向に広く土砂礫を堆積させている。

しかしそれも6年ほど前と比べ、あるいは更に遡りひと昔前と比べ砂利採取があちこちで行なわれた為規模が小さくなり、今では川床はほぼ一様に平らでも水も両岸いっぱい流れ、河原は形成されていない（図1.ニ）。それでも大小幾つもの中州を浮かべ、単調ななかに趣を添えている。

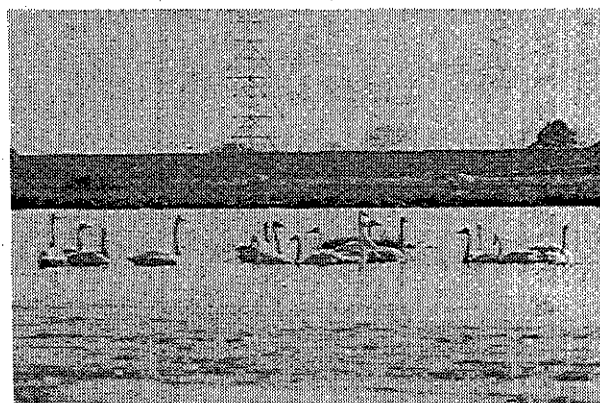
さらに下手には、鉄塔の建つ大きな州（以下“大州”と呼ぶ）があり、北側寄りは、過去砂利採取が行なわれた為か低地状になっており、鉄塔のそびえる“丘”と対比をみせている。

### 2. 一昨年度（昭和50年10月～51年2月）の状況

一昨年度この付近は10月下旬においても、白鳥滞留期間中最濁水期と思われる昭和52年2月下旬の水量には及ばず、そこかしこで川床が瀬となり、釣り人も膝くらいまでの長靴で十分行き来できた。加えて12月上旬からはその下手の大州で土砂採取が始まり、数条の中州のひとつは“ダンプ街道”となり、更に上手に進み造られた道は流れを堰止めた為、厳冬期にかけて水は伏流し、大きな水溜りを残し川床が露呈し、翌51年2月22日までこの状態が続いた。（図1.ロ）

一方“道”の上手には水が満々と湛えられたわけで、現に2月8日早朝には『白鳥が6羽、羽を休めていた』（砂利採取業者の話）とのことだったが、滞留するまでには至らなかった。

そこは当然岸近く以外に足の立つ所はなく、まわりも開けている為、平安を感じることができなかつたものと思われた。



F 8  $\frac{1}{500}$  S 52.1.7 利根川  
コハクテヨウ オオハクテヨウ

### 3. 昨年度（昭和 51 年 10 月～52 年 3 月）の状況

昨年度は大州を削っての砂利採取も行なわれず、川床はここ 4～5 年そのままなので、白鳥の餌となる水草も多く繁茂している。厳冬期にかけて心配された水量も、2 月下旬にかけて幾分減ってきたが目立ったほどではなく、一昨年のように気軽に中州に行くにはほど遠く、ほぼ白鳥滞留期間を通じて変らぬ水量を保ち、広い水面には小さい中州、更に足の立つ浅い所がそこかしこにあり、休息場所にも恵まれていた。（図 1.ハ）

昨年度のみならず例年カモを中心とする冬鳥は、10 月中旬頃よりその数を増し、ヒドリガモ・カルガモ（留鳥）・オナガガモを中心に狩猟解禁前には数千羽にふくれあがりにぎやかであるが、11 月 15 日を境に以後狩猟期間中はハンターが途絶えることなく（主に日曜日しか見ていないが）カモは飛散し、上空をやはりどこからか追われて来たのか小群で飛ぶのが見られる程度で、川面にはほとんど見られず、閑散とした淋しい毎日が続くこととなる。

年 月 日	カモの 数	ハンターの 数
S 51. 11. 21	24 羽	2 人はいた
23	少ないが時々上空を飛んでいる	何人か入っていた
12. 4	少ない	1～2 人
5	上空を小群で	4～5 人
11		2 人
19	1 羽	2 人ほどか
26	7 羽	3～4 人
30		入っていた
S 52. 1. 1	4～5 羽上空	入っていた
2	4 羽	めずらしく入っていなかった
3		
5	46 羽上空	2 人
6		1 人はいた
30	26 羽上空	

# 利根川近辺白鳥出現地

赤城山 ▲

榛名山 ▲

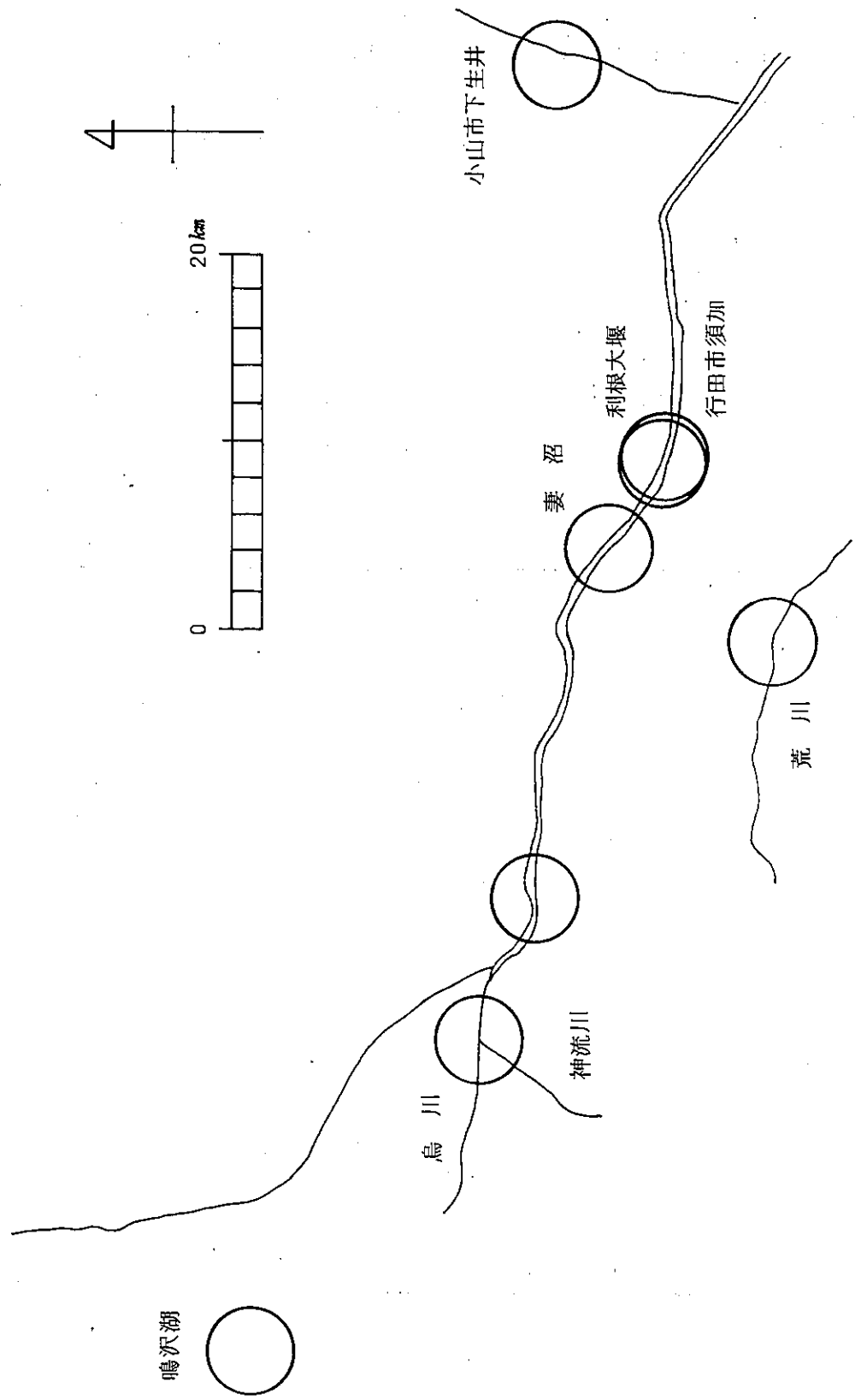
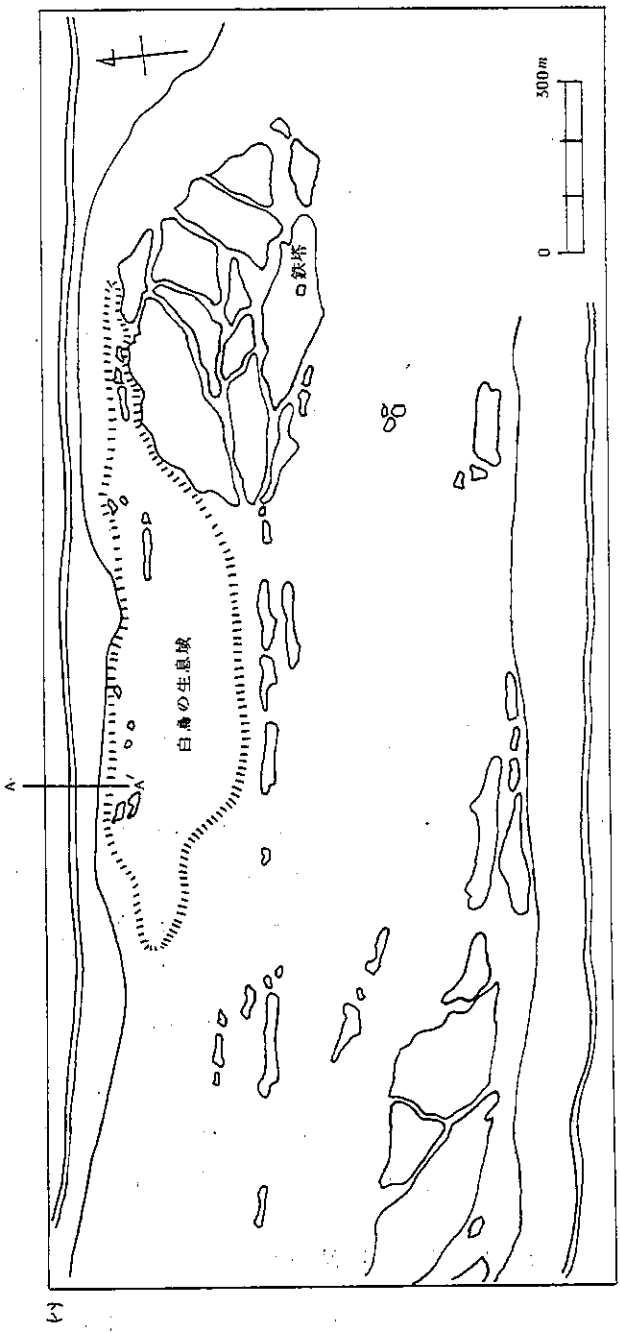
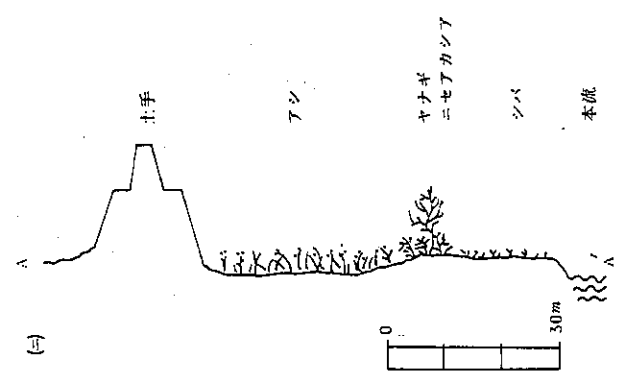
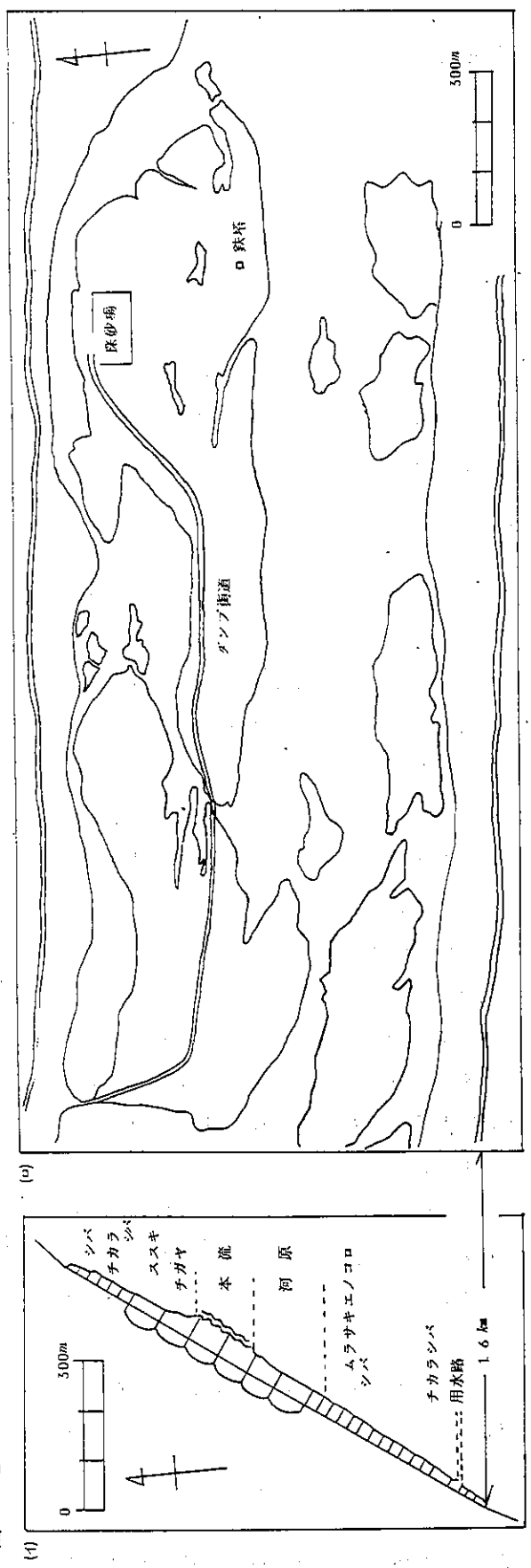


図 1



## Ⅱ 渡来・滞留・渡去状況

### 1. 利根川にて（昭和51年11月14日～52年1月15日）

昭和51年11月14日、前線が通過し西から晴れ間の広がってきた午後、初めて川面に休む白鳥（コハクチョウ、成鳥4羽、幼鳥2羽）を見ることができた。

折から川を遡って来た投網舟に追いたてられるように飛び立ち、少し上流へ降り、日没近く再び投網舟に追われ、元いた方へ飛び去った。

翌15日は狩猟解禁日であり、気掛かりだったので日の出前から行ったが、一斉に始まった発砲音に驚ろいて飛び立つのは、カモ・ゴイサギ等だけで、白鳥は見ることができなかった。

地元の鳥獣保護員、桜井義雄氏によると13日に4羽（成鳥2羽、幼鳥2羽）見たとのことで、更に11・12日頃すでに見られたらしく、埼玉県川越市の永島令一氏が49年・50年と2年続けて川越市で初認した（2年ともコハクチョウであり、同家族であった由）11日・14日と相まって、ほぼこの頃で一致している。

この頃、群馬県群馬郡箕郷町の鳴沢湖に白鳥（オオハクチョウ）が6羽飛来したとの記事があり、こちらとの関係を知りたく新聞社に問い合わせたが、『成鳥3羽、幼鳥3羽』とのことで、別群であった。

11月21日、水に浸った釣り人の向うに再び白鳥（コハクチョウ）が見られ、以後寒さが厳しくなるにつれ続々渡来し、年も押し詰った12月30日にはオオハクチョウも加わり、両種が同時に見られることとなった。

ところが年も明けた1月9日になって、この日は朝から空一面に雲が広がり、どうしたわけか1羽の姿も見られない。こうしたことは今までになかったことなので、「きのうの午後何かあったのかな」と落胆した。（8日の昼にはいた）

□伝えや、新聞記事を見てか人は来るが、結局その日は一日帰って来なかった。

翌日は、また見るできないような気がして行く気になれなかった。

1月11日 晴 「いる……いない……やっぱりいるよ……」と自問しつつ、それでもいないことを覚悟し土手の坂を登った。「いない」、落ち着いてゆっくりもう一度右手から左手へと見渡したが、やっぱりいない。それでも諦めきれず、土手上を少し下手へ進む。遅い冬の陽射はほうほうに隅を作り、そんなアシの枯枝越しに白い頭が見え隠れし、ひと安心した。

しかし、最初に定住した幼鳥を含む家族とオオハクチョウは消えており、まったく残念。

顔見知りになった本庄市のカメラマン（以下、Aカメラマンと呼ぶ）が、地元の人から聞いた話として聞かせてくれたところによると『8日の夕方、カメラマンが2人川へ入って追った』とのことだった。

また同カメラマンから、熊谷市の荒川に白鳥が来ていると聞き、更に『ここにいたやつが行ったんだよ』と教えられ、気を取り直し1月16日行ってみた。

### 2. 荒川にて（1月16日）

荒川大橋から見ると川幅は狭く、水量もまったく少なく、藻類は目につくが、水草はあまりあるよ

うには見えなかった。

荒川大橋とその上手の橋の間が白鳥の渡来地だそうで、こちらは幾分広がっているが、やはり水深はなく緩やかに河原が続き、子供達が石を投げたりのよくある光景が見られた。そしてここら一帯は、銃猟禁止区域になっているようでカモがたくさん集まっていた。

しかしかんじんの白鳥は、『朝、花火か何かの音に驚ろいて飛び去った』（馬場章一氏）とのことで見ることができなかった。地元の馬場氏や狩猟指導員の話によると『オオハクチョウ、成鳥6羽、幼鳥5羽』（以下、荒川群と呼ぶ）で、すでに正月の初め頃から来ていたそうで、利根川のとは別群であった。

また『いる時といない時がある』とのことで、前述したように川幅も狭く、人が容易に岸辺に近付け、それに餌の不足も相まって定住しにくかったのではないかと思われた。

荒川へ行けば彼等に会えるものと楽しみにしていたが、依然問題は解決しなかった。

### 3. 再び利根川にて（1月16日～2月12日）

帰って来てから再び利根川へ行ってみる。カメラマンが10数人並び見物人も多い。別の顔見知りになったカメラマン（以下、Bカメラマンと呼ぶ）から新聞の切り抜きを見せられた。それは1月12日付読売新聞“いずみ”欄で『栃木県小山市下生井に8日夕、オオハクチョウ・コハクチョウ11羽……』（傍点筆者）とあり、こちらから消えた日・種・総数が一致し、そこまで飛び去った可能性が大きくなったが、以前ハンターなどから聞いていた話によると、『この下流にもまだいい所がある』そうで（例えば利根大堰とか）釈然としなかったが、22日発表された“渡り鳥調査”によると、利根大堰まで調べ白鳥はここだけだそうで、やはり小山まで行った公算が大きくなった。

1月23日、新たに幼鳥を含む3羽が加わり（以下、放浪家族と呼ぶ）「戻ってきたか」と思ったが、成鳥1羽は、嘴上面の黒の額の羽の生え際まで達せずほんの少し手前で終り、黄が少し残っているので少くとも11月21日渡来したのとは違った。

ここから6km上流の神流川・烏川合流点に3羽いると聞いていたので、そこのかと思ったが、わからない。

またBカメラマンが切り抜きを見せ、埼玉県行田市須加の利根川に15羽いるとのことだった。

2月6日、土手を下りるとBカメラマンに行き会って『立て看が立ったね……28羽になったよ……あっちにもいるし。』と指さした。なるほど白鳥は間をおいて最初の14羽、放浪家族、増えた11羽と分散していた。過去の例から飛来してまだ間もないことと思われた。

新たにやってきたのは、コハクチョウ成鳥6羽、幼鳥5羽で、別のカメラマン（以下、Cカメラマンと呼ぶ）によると『この間、利根大堰上流3キロほどの所にいた11羽がいなくなっているの、ここへ来たのはそれだよ』ということだった。

なるほど現に荒川群は、時折どこかへ飛び去り、定住していないということなので、そこから北東へ10kmの利根大堰付近にも行っていたと考えられ、またオオハクチョウとコハクチョウは時々誤認もあるので、総数と成鳥、幼鳥数とも一致したのは興味深い。

しかし前述した行田市須加の15羽とは、大堰をはさんでわずか数kmしか離れておらず、荒川群はそこへも行ったかも知れないが、詳しいことはわからない。

#### 4. 小山市下生井にて（2月13日）

2月13日、話を聞いてからひと月以上たってしまったが、栃木県小山市下生井に行くことにする。5万分の1の地図（古河）を見ると小山市でもいちばん南で、こちらからほぼ真東へ4～5km離れた遊水池の近くに3つの小さな沼がある。「このどれかだろう」とあまり心配はない。すぐ隣に「白鳥」（しらとりと読むのかな）という地名があるのが何とも似つかわしい。

地図を頼りに歩いて行くと目の前に巨大な遊水池の堰堤がそびえ立ち、登り詰めると遙かかなたまでアシ原が続き、小春日和のなかに霞んでいる。すぐ向うのもうひとつの堰堤から見ると、右手前方の田圃の中に人が集まっている。

「どうやらいそうだ。」

畦を歩きながら数える……「12羽」……おかしいと思ったが、記事では11羽だったので気にしない。

さてそこで、1月8日夕方、利根川から確実に飛去したのは、オオハクチョウ成鳥2羽、コハクチョウ幼鳥4羽である。そして、仮に各々の親と思われる成鳥4羽と、一方の家族と思われる成鳥1羽と一緒に飛去したとして、オオハクチョウ成鳥2羽、コハクチョウ成鳥5羽、幼鳥4羽の計11羽であった。

一方小山群の内訳は、オオハクチョウ成鳥2羽、幼鳥1羽、コハクチョウ成鳥5羽、幼鳥4羽で、オオハクチョウの幼鳥1羽はやはり「2月10日頃やって来た」との発見者鶴見清氏の家族の話なのでまったくこちらと一致した。

またコハクチョウ成鳥5羽の嘴上面についても、黒く「ツツ」しているのが4羽（親と思われる）で、黄色く「ヌケ」しているのが1羽（一方の家族で亜成鳥と思われる。なお、この嘴上面の黒・黄については後述する。）であったが、小山群については「ツツ」が3羽、「ヌケ」が1羽で、もう1羽は額の所、羽の生え際まで黒く続いておらず、少し手前でプツリ切れ、ほんの少しだがはっきりと黄の部分を残していた。

しかし、利根川においては、遠くのを望遠鏡で見ていたので明らかに「ヌケ」していたのはともかく、わずかに残る黄色部は見落し「ツツ」としたものと思われ、嘴上面に関しても両群は一致した。

（なお、このような個体は、1月23日加わった3羽のうちの1羽でも見られた。）

ところでこの付近の様子だが、いちばん近い家まで200mほどの田圃の中の差し渡し60mくらいの小さな池が渡来地で、地元の鶴見氏の努力により今ではすっかり餌付き、まわりには市の手によって野犬除けの金網がめぐらされ、我々との間もほんの7～8mで観察できた。

私はボス（11月21日に渡来した親の仮称）に再び対面できるのを楽しみにしていたが、今まで“高嶺の花”ならぬ“遠瀬の白鳥”と望遠鏡で見ていたのと勝手が違い、彼等を目の前にして「これがあの時のお前達なのか」と自問せずにはいられず、人間にこれほどまで係わらなければ生きてゆけない（それほどまでにこの近辺に彼等の安住の地はなく、彼等は40kmに及ぶ利根川、そして群馬県東部の湖沼を差し置き、わずか100m足らずの小さな池を選んだのだ）彼等が哀れに思われ、再会できた感激もなく帰路についた。

## 5. 利根川にて（2月13日～2月26日）

2月19日、13日から消えた放浪家族を求め、以前いたらしい神流川・烏川合流点へ行って見たが見当らず、付近には狩猟期間もようやく終り、三々五々集まったオナガガモ・ヒドリガモ・コガモなどがくつろいでいるだけだった。

翌日も3羽を追い坂東大橋上流4kmの五料橋付近まで捜したが、見つからなかった。

この頃より水量が幾分減り始め、陽気も段々好くなるにつれ、釣人、そして特にカメラマンがより近くで写真を撮りたい為、中州に渡るのが心配されたが、2・3人の者を除き多くは彼等を暖かく見守っていた。

彼等は岸辺に数十名人が集まっても、あるいは中州でハンターが発砲してもそれほど不安は感じなかったようだが、自分達のいる同水面を動く舟や人には極度に緊張し、舞い立たねばならない時が何度かあった。

## 6. 利根大堰から坂東大橋（2月27日）

4月上旬並の気温が2・3日続いた穏やかな2月27日、今だ未調査地であった利根大堰にかけて踏査してみた。

自転車で2時間、水を満々と湛えた大堰にはボートや釣り舟が繰り出し、遙か上手に鳥影が認められるものこちらにはまったく見られない。

既述したように埼玉県行田市須加は、ひっきりなしに車の行き往う大堰を渡った右岸のすぐ下手で、この付近は左岸からの河原の発達が著しく、堰を滝となって流れ落ちた水は、線を引いたようなすっきりした兩岸を中州も浮かべず、およそ幅300mとなってゆっくり流れ、望遠鏡の能う限り更に下手にも目をやるが、それらしき姿は見られず、右岸沿いを遡ることにする。

大堰付近では見られなかった鳥達も、川が長い湖状となった中部付近には見られ、端から見ると、見るカモ見るカモ全部トモエガモ。動物園で一度見ただけで野生のを見るのは初めて、それに西日本には比較的多いが、全体としては数は少ないと聞いていたので、今でも「違ったんじゃないか」という気がしてならない。地図を広げると背に“稻何塚”が控えていた。

『野鳥』、通巻365号、昭和52年2月号によると、『1月5日、オオハクチョウ成鳥3羽、若鳥2羽が利根大堰に』とあり、Cカメラマンのみならず観察されているのだが、何せ、首を伸しても川床に届くはずはなく、加えて釣り舟や爆音を響かせたモーターボートが疾走しては、とても定住するまでには至れなかったものと思われた。

さらに遡上を続け、そろそろ堰の影響も見られず川は川らしくなり、中州も浮かべているあたり、大堰から5.5kmほどの所に高水敷を利用して妻沼のグライダー滑空場があり、これがちょうど川と陸地との緩衝地帯のような役割を果し、向う岸は崖状となっている為釣り人等が水辺に見当らない。このあたりも“よどみ”というのはなさそうで、水は浅く広く流れていた。

そんな川面の小さな中州にコハクチョウが3羽（成鳥2羽、幼鳥1羽）休み、これが2月13日以来姿の見えなかった放浪家族と思われた。

さらに進み、刃水橋も過ぎなおも行くと小山川が合流する。このあたりは川幅も広く、なかなかい



い感じだった。

上武大橋を過ぎ、そろそろ見慣れた景色が広がってきた。こちら側から見ると人が50人ほど見物にきている。遠くから数を数える………25羽。妻沼にいたのはやはり放浪家族だろうと思われた。

## 7. 利根川にて（2月28日～3月28日）

3月6日、再び放浪家族が加わり28羽になった。この頃より水量も増加し始め、心配もひとつ遠のいた。また今までの広い水面下では餌が底をついたのか、徐々に下手で採餌するようになり、そして何か不安なことでもあったと水面を蹴り、羽ばたきながらいつもの広い水面に出て来るような行動が繰り返され、日を追うごとにより下手へ採餌場は移動し、大州の水路に入り、こちらからでは容易にその姿に気付かないこともあった。また放浪家族は離れ、大州の最下部に見られた。

冬に逆戻りしたような3月21日、風が強く彼等は広い水面に出ていた。数は24羽。24羽という時は何度かあった（放浪家族に成鳥1羽が加わり消える）ので、またそうだろうと思ったが、見当らないのは成鳥1羽、幼鳥3羽で、放浪家族はいた。

翌22日、北西の風が少し吹く寒い朝、1羽もいない。大州の最下部の放浪家族が見られ、上流に行っているのかと思い（上流で見た試しはないが）捜したが見付からず、北帰したものと思われた。

3月27日、北西の風が南東に変わったが少しも暖かくなく、見物人もカメラマンも数人になってしまった日、放浪家族は広い水面に出て、わずかに食べ残した餌を採っていた。そのうち南東の風をうけ飛び立ち、すぐ右旋回し上流へ向け飛行。我々は「帰るぞ」とこの目で見送れるというひとつの感動的な場面を期待したのだが、あに図らんや彼等は引返し、元いた所へ着水。



北から西へかけては折から雲が広がり山も見えず、半ば残念だったような気持で各々夕げの家路へ向った。

3月28日、日中には行けず夕方5時半頃行く、大州の最下部にも見当らない。夕べは雨が降ったが、朝方には晴れていた模様で、ついに帰ったようだった。

別表 1

利根川（伊勢崎）における白鳥渡来・滞留・渡去状況

種 内訳	年 月 日		S			51			S			52						
	11	14	21	28	12	19	30	1	6	8	11	13	23	2	6	13	28	
コハクチャヨウ 成鳥 4(?) 幼鳥 2	■																	
コハクチャヨウ 成 3 (ヌケ 1) 幼 1																		
コハクチャヨウ 成 5 (ヌケ 3)																		
コハクチャヨウ 成 2(?)																		
オオハクチャヨウ 成 2																		
コハクチャヨウ 成 5(?)																		
コハクチャヨウ 成 2 (ツツ 2) 幼 3																		
コハクチャヨウ 成 2(?)																		
コハクチャヨウ 成 2 (ツツ 2) 幼 1																		
コハクチャヨウ 成 6 (ヌケ 2) 幼 5																		

※ ツツとは  嘴上面黒、ヌケとは  嘴上面黄色でこれは亜成鳥と推測されるが、ここでは幼鳥以外は一括して成鳥としてある。